

礼拝堂下でひっそり讚美を聴いている

牧師 山本 護

「翌日の明け方、神は虫に命じて木に登らせ、とうごまの木を食い荒らさせられたので、木は枯れてしまった(ヨナ書 4:7)」

早春、教会の林を間伐した。幾人かが幾日も働いたので4~5年分くらいの薪は確保でき、余力でナラの木に駒菌を打ち込んで椎茸栽培の準備をしました。栽培と言うと労苦ですが、ちょっとした日陰にただ放っておくだけのこと。何も手をかけず月日が経ち、もう忘れかけている秋の日に、ぴょこんと椎茸が出ている、という寸法です。

かの南方熊楠の門弟で、熊楠に『粘菌大王』と呼ばれた小畔四郎はこう記しています。「茸は最初、卵の白身のような粘液状態で活動し、バクテリアを食って生育する。この時期だけ見ると動物にまちがいないのだが、一定の時期がくると木や土の外に出てきて他の物体にくっついて茸状になる。その中には孢子が充満していて、これが風で飛び活動し始める、といった繁殖法だ。この点植物には違いない(1936年 昭和11年)」。

小畦先生の観察で興味深いのは、粘菌の捕食は動物そのもので、孢子での繁殖は植物そのものだ、というところ。ちなみに私は、哺乳類なのに卵を産むカモノハシのような、なんじゃこりゃという生物が好きだが、粘菌のなんじゃこりゃ加減も神の創造の驚くべき多様性を物語っていて、未知なる世界の奥行きにクラクラさせられます。

八ヶ岳教会の聖餐式の式文、序詞だけはオリジナルのものを用いています。「～主なる神によって大地はつくられ、その豊かさによって麦が実りました。主なる神によって太陽はつくられ、その光によって葡萄が実りました。麦がパンになり、葡萄が酒になるまで、人、鳥、昆虫、微生物たちの労働がありました。これら、生きものそれぞれの働きを互いにつなぎ合わせておられるのも、主なる神の御配慮です～」。

椎茸の粘菌は、伐採したナラの木の中で動物のようにバクテリア(微生物)を食い、忘れかけた秋の日に植物のごとく孢子を抱えた椎茸となる。礼拝堂下のナラの木に潜んで毎週キリスト者の讚美を聴いている粘菌。微生物を食らう粘菌と私たちとの間には、ミミズやカナヘビや鳥の労働があつて、涼しい樹陰をつくる数多の木々があります。いつか椎茸がぴょこんと出る頃、その半分くらいは収穫して私たちも食らいたい。主なる神がつなぎ合わせておられる被造物の一員として。Ω

